

日刊 動労千葉

79.12.15
No. 300

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)二五八・九・(公衆)福生(22)七二〇七

ヤニ〇〇号の発行にあたって

「日刊」編集委員会は、本日第三〇〇号を達成し、「全国版」の発行も第四一号を数えていくことと併せ、この間「日刊」が動労千葉の八ヶ月間の激闘に組織争闘戦の勝利を大きく切り拓いてきたという事実を、誇らかに確認するものである。

「日刊」は動労千葉の日常的闘い

「日刊」編集委員会は記念すべき創刊号において次のような決意表明と要請を行った。

第一に、「日刊」の発行と継続は動労千葉にとって並々ならぬ試練であり、執筆、タイプ、レイアウト、校正、印刷等々の体制を編集委員会あらゆる困難をのりこえて担い切る決意であること。第二に、「日刊」の意義を意義たらしめるものは全組合員・家族が「日刊」を「読み、理解し、提起された方針にもとづいて行動すること」であり、全組合員が家族に至るまでの配布体制を万全に確立し、「日刊」を手にしたら「まず読もう」と提起し、要請したことである。

今日、この決意と要請は動労千葉の日常的闘いとして確実に血肉化されている。

同時に、動労内外からの講読申し込みが多数寄せられ、支援共闘会議を軸とする全国の多数の有料講読者の存在が、「日刊」発行の財政的基盤を大きく支え、動労千葉の闘いへの真の支援・連帯の環の拡大という面においても「日刊」がその水路を確実に切り拓いたということを、われわれははっきりと確認できるのである。

粉碎された「本部」のデマ宣伝

この「日刊」に対し、自らのデマ宣伝を完全に粉碎された「本部」反動暴力分子は、「動労千葉が日刊体制を維持できるはずがない。動労千葉以外の場所で作られているものだ」などというデマをふりまき、そのデマにすがりつくことによつて自らの破産の現実から逃れようとしている。笑止千万である。確かに日刊体制を維持することの困難性は筆舌に尽しがたいものがあり、日々われわれに刻苦を強いるものであった。

しかし、われわれはやり抜いたのである。編集のスタッフは教宣部を中心に執行部、書記局が全力をあげ、他の組合業務を全うしつつ、尚、編集委員会の任務をも担い、この間、四八回の編集会議を開催し、激烈な討論も含めた意志統一をもって編集方針を確立し、取材し、書き、タイプを打ち、印刷機をまわし、深夜から早朝に至り発送時間ギリギリに完成するということもしばしば経験しながら、連日「日刊」を送り出して

きたのだ。

真実は真実を闘った者のみが語ることであり、「日刊」体制を真に支えてきたものは動労千葉一四〇〇名組合員・家族の真実の闘いである。「水本」と「安定宣言」というデマと虚構の上に真実を語ることなどはできない。

「日刊」編集委員会は「反合・三里塚ジェット闘争」を中軸とする動労千葉の真実の闘いに依拠し、今後、さらに充実した「日刊」体制を堅持し、発展させてゆく決意である。

まず読もう！
必ず読もう！
意見・情報を集中しよう！

「日刊」編集委員会は以上の決意に踏まえ全組合員に次のことを提起し、要請する。

第一に、連日手元に届いた「日刊」を「まず読もう！」「必ず読もう！」という体制をより一層職場・生産点で深化させ、「日刊」で報告されたことについての討論を深めることである。

第二に、職場・生産点の意見と情報を「日刊」に集中することである。

われわれは、圧倒的な成功をかちとった動労千葉第三回定期大会を起点に、反合・三里塚ジェット闘争勝利、動労大改革を中心とする動労千葉の闘いを、より一層自らのものとして高め、担い切る決意をさらに全体化し、団結を固めてゆかなければならず、「日刊」はそのために活用されなければならぬ。

全組合員が、あらゆる情報や意見を「日刊」に集中し、「日刊」がそれを反映することによつて動労千葉の闘いを、より一層階級的な高みに押し上げてゆくようではないか。

「日刊」編集委員会は取材体制を一層強化し職場・生産点の「生の声」を紙面に反映してゆく決意である。「日刊」は「みんなの力」で創られなければならない。

「日刊」を全組合員の力で充実させ、動労内外の全労働者・人民に、動労千葉とともに闘うことを呼びかけてゆく。